

# 若者が戦争語り継ぐ

## 演劇や映像きょう披露

筑波海軍航空隊記念館 筑波大や学院大生ら

戦後70年を迎え戦争体験者が少なくなる中、戦争を知らない世代が戦争語り継ぐこと、筑波大や筑波学院大、筑波研究学園専門学校、学生らによる演劇や映像、紙芝居などが17日、笠間市旭町の県立こころの医療センター内にある筑波海軍航空隊記念館で披露される。

（鈴木宏子）



旧筑波海軍航空隊司令部庁舎内で演劇の練習をする筑波学院大の学生ら

memo

筑波海軍航空隊 霞ヶ浦海軍航空隊（阿見町）の分隊として1934年に発足した旧日本海軍の部隊で、戦闘機に搭乗する予科練卒業生や操縦訓練生が初歩の操縦訓練を行った。戦争末期の44年以降は戦闘機部隊となり、特攻隊を編成して沖縄方面で空中戦を展開した。施設は戦後、県立友部病院となり、司令部庁舎が管理棟として使用された。2011年、同病院の敷地内移築に伴い解体される予定だったが、映画「永遠の0（ゼロ）」ロケ地として使われたことを機に、今年3月まで記念館として公開されている。17日イベントを主催する同実行委員会は保存を訴えている。

開館1周年を迎えた同記念館を運営する「語り継ぐ記憶実行委員会」（金澤大介委員長が今年取り組む）語り継ぐ戦争プロジェクトの第一弾。同記念館の保存などを卒論のテーマにした筑波大4年の矢作美佳さん、大学独自の地域貢献活動「オフ・キャンパス・プログラム」の一環で同記念館の活動に関わってきた筑波学院大3年の小島健史さんが取り組む。矢作さんは「記憶のプラネタリウム」と題し、各家庭で祖父母から語り継がれている「昔、家の居間に防空壕が掘られていた」などの戦争体験を文字にして、同記念館内に残る地下要塞の空間にプラネタリウムのように浮かび上がらせる。併せて筑波研究学園専門学校生4人とともに記念館の保存などについて話す。小島さんは、小学校の教科書の教材にもなっている戦中・戦後を生きた家族3人の物語「二つの花」の演劇

を披露。「今と違って戦中、戦後のものがない時代に、家族3人がどう思うかをして見たのかを思いながら見てくれたら」と小島さん。ほかに茨城大生が水戸大空襲をテーマにしたオリジナルの紙芝居を上演。新たに発見された地下医療所なども公開される。5歳の時、同航空隊教官だった父をしてしている同実行委員メンバー市原裕子さん（71）笠間市川は17日、大學生らとともに朗読会

などを開く。「平和がどんなに尊く、守らなければならぬものなのか、若い人が考えるきっかけになれば」と話している。